

◀完成したばかりのCykelslangen(直訳で「自転車スネーク」)。蛇のようにくねくねとした自転車専用バイパス道。



#### デンマーク王国 DATA

人口562万人(≒北海道)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。

当会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度が高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。



LETTER FROM COPENHAGEN

## コペンハーゲン通信

8

### PART IV

## 午後四時終業の妙

コペンハーゲンでは、午後四時から五時にかけて、早くも帰宅ラッシュのピークを迎えます。一般道は車で混み合い、自転車通勤者は列をなして専用道路を走り抜けていきます。木曜・金曜になると、ラッシュのタイミングはさらに早くなり、昼過ぎには混み始めます。午後六時以降は、もはや街はもぬけの殻という感じで、車や自転車はまばらになり、電車はガラガラとなります。そのくらいの時間帯から帰宅ラッシュを迎える日本とは大きな違いです。

デンマークでは、セクターごとの包括的労使間合意によって労働条件が決められますが、ほとんどの場合、週当たりの労働時間は37時間となっています。勤務時間帯は、午前八時台から午後四時台というのが一般的です。そのうち、30分の昼食時間も労働時間としてカウントされているところが多いようです(みんな、オープンサンドのような簡易なランチで手早く済ませてしまいます)。仮に月・火・水とそれぞれ八時間働くと、木曜と金曜は計三時間早く帰宅できる計算になるので、昼過ぎから帰宅者で混み合うという現象が見られるというわけです。

木曜・金曜の「早引け」はともかく、このデンマーク流の働き方の大きなポイントは、午後四時台には、老若男女問わず、大多数の人が仕事を終えるという点にあると思っています。日本でも、小さな子どもがいる女性社員に対して、終業時間を早めるといった特例を認めている企業がすでにあるとは思いますが、デンマークの場合、男女問わず、午後四時台に上がります。そうすると、例えば小さな子どもがいる家庭の場合、両親が仕事を終えた後、どちらかが子どものピックアップを行い、もう一方が自宅家事や食事の準備をし、午後六時ぐらいには家族そろって夕食を共にする、という絶妙な生活サイクルが実現します。これが、早く帰れるのは女性だけで男性の帰宅が遅かったり、終業時間が午後五時や六時以降になると、この絶妙さが輝きを失



#### 木下 潤一

在デンマーク日本大使館一等書記官  
(経済同友会事務局より出向中)

うのだと思います。ちなみに、デンマーク人の知人によれば、男性が家事や育児に公平に関与することは、もはや常識中の常識で、亭主関白のような態度をとれば、妻からは即見放されてしまうと言います。

以上のような状況ですから、デンマークでは、対外的な社交や接待も、ほとんどランチ・ミーティングとなり、夜のお付き合いがほぼ皆無になることは、お分かりいただけると思います。私自身、こちらに赴任してから、デンマーク人とのワーキング・ディナーはほとんど経験がありませんし、よほどのことがない限り、お誘いできる雰囲気ではありません。

これだけ皆が早く帰ってしまったら、デンマークの経済は回らないのではないかと思われるかもしれませんが、しかしながら、経済協力開発機構(OECD)のデータによれば、一時間当たりの労働生産性は、日本が40.1ドルに対して、デンマークが59.5ドルと、実に48%も高くなっています。その結果、デンマーク人の労働時間が、日本人に比べてこれだけ短いにもかかわらず、デンマークの一人当たりGDPは、42,176ドルと、日本の35,203ドルより、約20%高い結果になっています(共に2012年データより)。このデータを見る限り、労働時間はアウトプットに必ずしも比例しているわけではなさそうです。

それにしても、午後四時に仕事を終えてみんなで一齐に帰宅するというのは、日本人の感覚からして、まだまだなじめないでしょうし、夜の残業や飲み会にもやはりそれなりの意味があるのだと思います。しかし、女性の社会進出や少子化といった課題に対処していくには、全体最適を考慮し、家族全体で無理なくうまく回っていく仕組みを作っていくことが大きな鍵であることを、デンマークの例が示しています。